View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by GLIM IR Institution Repository

伝記的事実の齟齬について
――スコット・フィッツジェラルドの場合

内田　　勉

世界のフィッツジェラルドの研究者が集う国際学術団体 the F. Scott Fitzgerald Society が推奨するフィッツジェラルドの伝記・評伝は、Arthur Mizener の *Far Side of Paradise*（初 版 1951 年、改 訂 版 1965 年）、Scott Donaldson の *Fool for Love*（1983 年）、Matthew J. Bruccoli の *Some Sort of Epic Grandeur*（第 2 版 2002 年）の三冊であり、Andrew Turbull が 1962 年に刊行した *Scott Fitzgerald* は含まれていない。理由は容易に推察出来る。ターンブルの伝記は引用文献の情報が全くなく（1970 年、ペリカン版においてターンブル自身が初めて典拠の多くを明示）、研究資料としては使いにくいということがあり、伝記的事実においても Mizener や Bruccoli に比べ、間違いが多い。また、作品分析が殆どないことも理由の一つになるだろう。しかし、そういう弱点は認めながらも、人間フィッツジェラルドを恐らく最も深く描いた伝記として、抗しがたい魅力を覚える読者は専門的な研究者も含めて、今も少なからずいると思う。英語で書かれたフィッツジェラルドの伝記は、英訳されたものも含めて 7, 8 冊になると思うが、実際のフィッツジェラルドを間近に見ながら一定期間生活した伝記作家はターンブル一人であり、ターンブルにしか書けない La Paix（ラ ペ）時期の事実、つまり、*Tender Is the Night* 執筆時期に関わる重要な伝記的事実が少なからずあることも考えれば、ターンブルの伝記には色褪せぬ価値が存することは否定出来ない。私はターンブルの

Scott Fitzgerald を 1978 年に修論の準備として初めて読み、時には息がとまるほどの深い感銘を受けながらも、修論には全く使わなかったことを今でもよく覚えている。論文を書く時に使いやすいのは、Mizener や Bruccoli なのである。それ以来、*Scott Fitzgerald* を通しで読むことは一度もなく、1988 年に刊行された日本語訳も読まなかった。

今年（2014 年）になって初めて『完訳フィッツジェラルド伝』（永岡・坪井訳）を原作と照らし合わせながら精読したのには、きっかけがある。フィッツジェラルド伝記研究の「出発点は “Ledger”」[1] であると言ったのは、いみじくもターンブルであったが、そのことに異論を唱える研究者はいない。ターンブルが伝記を執筆した時には “Ledger” は出版されていなかったが、1973 年にファクシミリが *F. Scott Fitzgerald's Ledger* として Bruccoli により刊行された。[2] フィッツジェラルドの研究者で *Ledger* を読まない人はいない。フィッツジェラルドの手書き原稿は読みやすいと言われる。私も大体においてその通りだと思う。しかし、長いこと私には *Ledger* の手書き原稿を全部読み切ることが出来なかった。それ故に、フィッツジェラルドの伝記的事柄について何か言う時に、落ち着きの悪さを絶えず感じていた。宿願の一つであった *Ledger* 完読を 2014 年 3 月に果たすことが出来た。また、フィッツジェラルドが 1910 年から 11 年にかけて付けていた日記、*Thoughtbook*[3] の手書き原稿もほぼ同時期に初めて完読出来た。遅まきではあるが、フィッツジェラルドの伝記研究を試みる最低の資格は得たと思う。日本では、ターンブルの伝記が、原著にはない多くのすぐれた註を備えた翻訳で読まれることも多いので、本論文では、その翻訳も含め、上記のいくつかの代表的な伝記の記述内容にどのような問題があり、それらがなぜ発生し、また、どのように解決され、或いは解

1） Andrew Turnbull, *Scott Fitzgerald*, Ballantine Books, 1971, p. 341. 以下、同書からの引用は頁数のみ引用文末の括弧内に示す。日本語への訳出は引用者自身による。

2） *Ledger* は『完訳フィッツジェラルド伝』では『出納簿』と訳されている。

3） *Thoughtbook of Francis Scott Key Fitzgerald*. ed. Kuehl. Princeton, N.J.: Princeton University Library, 1965.

決されていないかを考察し、評価を試みる。更に、解決されていない事柄、即ち伝記的事実の齟齬のいくつかについて、私自身による解決を示す。

フィッツジェラルド自身によって書かれた彼の生活記録を含む *Ledger* が、伝記記述の上で最も基本的な資料であることは言うまでもないが、*Ledger* には客観的事実としての間違いが多い。例えば、*Ledger* の 1910 年 6 月と 7 月の項にそれぞれ “Mr. Shotwell killed” という同じ記述がある。[4] これは、フィッツジェラルドが 13 歳だった 1910 年に目撃した自動車事故に関する記述で、この事故の記事が *St. Paul Pioneer Press* という新聞にのり、そこにフィッツジェラルドの証言が引用されていることが分かっている。フィッツジェラルドの証言は、「運転していたのは女性である」とか、他の目撃者の証言とは異なり、「その女性がスピードを出していた」とか、[5] *The Great Gatsby* における自動車事故を想起させ、興味深いものがあるが、実際にその新聞を入手すると、日付は 1910 年 5 月 23 日で、Mr. Shotwell は事故に遭った 22 日に死亡していたことが分かる。[6] *Ledger* のいずれの記述も正確ではないのである。フィッツジェラルドが *Ledger* をいつから実際に書き始めたかということについては、いくつか説があり、決定的な裏付けとなる資料はないが、いくら早くてもフィッツジェラルドがプロ作家として作品を発表し始めて以降、つまり、1919 年 9 月以降ということでは研究者の意見は一致している。とすれば、1910 年に目撃した自動車事故は記憶に基づいて書かれたものであり、1, 2 ヵ月のずれをもって、*Ledger* の記述の不正確さを指摘するのは大げさと思われるかもしれない。[7] しかし、*Ledger* を丹念に読んでいくと、フィ

4） *F. Scott Fitzgerald's Ledger*, p. 64. 以下、同書を引用もしくは参照する時は頁数のみを示す。

5） David Page & John Koblas, *F. Scott Fitzgerald in Minnesota: Toward the Summit*, 1996, p. 56–7.

6） 新聞の入手にあたっては、学習院大学図書館レファレンス担当者とミネソタ州セントポール公共図書館の多大なる支援を受けた。

7） 付記するが、フィッツジェラルド一家はこの自動車事故の 4 ヶ月後、1910 年 9 月に Shotwell の家に転居した（*Ledger*, 165）。少年フィッツジェラルドにとって、忘れ得ぬ事故だったのである。

ッツジェラルドがプロ作家として活躍して以降も、不正確な記述は少なくないのである。そのような例をいくつか示す。

フィッツジェラルドの二番目の長編小説 *The Beautiful and Damned* は、*Ledger*（176）においては 1922 年 2 月に出版されたと記してあるが、正しくは、1922 年 3 月 4 日である。ヘミングウェイがニューヨークからフロリダへ向かう特別急行列車の中で父親の自殺の電報を受け取り、急遽、父親の葬儀に参列するため当座の費用をフィッツジェラルドから借りたのは有名なエピソードであるが、*Ledger*（183）では 1929 年 1 月のことと記されている。正しくは、1928 年 12 月 6 日である。[8] また、スポーツライター、ユーモア作家として名高い Ring Lardner はフィッツジェラルドの数少ない親友の一人であり、フィッツジェラルドはラードナーの死に際し、追悼文 “Ring” を *The New Republic* 誌に載せているのだが、ラードナーの死亡日（1933 年 9 月 25 日）を *Ledger* では 1933 年 1 月としている。但し、このような種類の間違いは比較的分かりやすく、正しい情報を他の

8） 私はこの日付の確定の根拠をヘミングウェイの伝記として定評のある Carlos Baker の *Ernest Hemingway: A Life Story*（1969）に求めたが、日付は記されていなかった。後述するように、フィッツジェラルドの伝記の書き方において、伝記作者は日付の問題に無頓着、もしくは、敢えて回避する傾向が非常に強いと思うが、これは、フィッツジェラルドの伝記だけではなく、アメリカ人作家の伝記叙述の方法一般の問題であろうと考えている。Baker がヘミングウェイの父親の自殺に伴う出来事の日付を記さなかったのは、いみじくも、この問題の一端を現わしていると思う。この日付の確定は、現在最も信頼出来るヘミングウェイの伝記 Michael Reynolds の五巻本の一書、*Hemingway: The American Homecoming*（pp. 207–9）によった。Reynolds はこの書で、ヘミングウェイの父親の死と、その緊急事態に際し即座に、フィッツジェラルドがヘミングウェイに金を貸して助けたことを四つの文書資料を挙げて示している。一つは、ヘミングウェイの母親 Grace がスクリブナー社に送った手紙（1928 年 12 月 6 日、プリンストン大学図書館所蔵）、二つ目は、ヘミングウェイの妹 Carol が車中のヘミングウェイに打った電報（同日、John F. Kennedy Library 所蔵）である。三つ目と四つ目は、いずれも Carol からの電報を受け取った直後に、ヘミングウェイがマックスウェル・パーキンズに打った電報（12 月 6 日午後 5 時と 8 時、両方ともプリンストン大学図書館所蔵）で、前者はヘミングウェイがパーキンズに電報為替で 100 ドル送ってくれと要請したもので、後者は、フィッツジェラルドが金の手当てをしてくれたので、前者の要請を取り消したものである。この件で、ここまで証拠文書を明示したのは Reynolds が初めてではないか。今、フィッツジェラルドの伝記に要請されているものは、まさしく Reynolds が例証したように、入手可能な文書資料は全て列挙し、矛盾の多いフィッツジェラルドの伝記的事実を推定によってではなく、証拠文書によって確定することである。

資料から比較的得やすいので、専門の伝記作家が間違えることはまずない。問題は、伝記的事実の記述がフィッツジェラルド自身の記録のみに依存する、或いは依存度の非常に高い事柄において発生する。例えば、ターンブルはフィッツジェラルド夫妻が、三度目の渡欧から 1928 年「9 月に帰国した」（187）と記す。*Ledger*（183）の 9 月の項にある、「前述の嵐にもまれた客船カルマニアで帰国した」というフィッツジェラルドの記述に従ったからである。同じ帰国について、ブルッコリは「1928 年 10 月 7 日」（266）と書く。フィッツジェラルドはこの年 10 月 1 日にはまだパリにいて、そこから、エージェントであるハロルド・オウバー（Harold Ober）の働くニューヨークのオフィスに国際電報を打ち、「10 月 7 日にアメリカ入国。5 番目のバジル物語受領次第 10 月 1 日に 800 ドル送金されたし。返電は客船カルマニアに」と、[9] 緊急の依頼をしたことが分かっている。この電文を含む多数のフィッツジェラルド・オウバー往復書簡はオウバー死後（1959 年）、オウバー夫人が所有していたが、1972 年に *As Ever, Scott Fitz-* のタイトルでブルッコリが編集・出版した。ブルッコリは、ターンブルが伝記を書いていた当時には知られていなかった資料を使って、*Ledger* の記述の誤りを繰り返さずに、正確な事実を記すことが出来たのである。新しい資料が使えるようになることによって、伝記記述がより正確になるという、フィッツジェラルド学の着実な進歩を示す好例である。伝記によって食い違う事実について指摘することの比較的多い『完訳フィッツジェラルド伝』は、この件に関しては触れていない。

Ledger の記述をよく咀嚼して、その採用については比較的慎重であったマイゼナーにも、ターンブルと同様の誤りがある。T. S. Eliot がジョンズ・ホプキンズ大学で講演した後、ターンブル夫妻（Andrew Turnbull の両親）はエリオットを主賓として自宅でディナーを催したが、この席に

9） *As Ever, Scott Fitz-: Letters Between F. Scott Fitzgerald and His Literary Agent Harold Ober 1919–1940*, p. 119. 以下、同書からの引用は頁数のみ引用文末の括弧内に示す。日本語への訳出は引用者自身による。

フィッツジェラルドも招待された。*Ledger*（187）には1932年11月の項に言及がある。マイゼナーは、これに従い、“T. S. Eliot came to Hopkins in the fall”（249）と書いたが、[10] これはフィッツジェラルドの間違いに基づいたマイゼナーの誤認なのである。明白な証拠がある。この席で、フィッツジェラルドはエリオットの詩を朗読し、エリオットから謝意を込めて、*ASH-WEDNESDAY* を贈呈された。この本の現物は現在、サウスキャロライナ大学の Bruccoli Collection の中にあるが、フィッツジェラルドへの謝辞とエリオットのサインと日付のあるタイトルページが *Correspondence of F. Scott Fitzgerald*（305）に収載されている。日付は、1933年2月3日である。フィッツジェラルドはエリオットに会ったことに関し、1933年3月頃、Edmund Wilson に手紙（Yale 大学所蔵）を出している。ブルッコリは、この二つの文書資料を用いて、エリオットがジョンズ・ホプキンズ大学で講演した日を1933年2月と特定したのである（341）。ここで断っておかねばならないが、本論の目的は、のちに利用出来るようになった新しい資料を使って、過去の伝記にはいかに多くの誤りがあるかを指摘することではない。どの時代にも、その時代の資料的制約があるものなので、研究が着実に進歩すれば、過去の伝記の中にある間違いは訂正され、少なくとも、伝記的事実に関しては、より正確な知見が広まるのは当然なのである。ところが、フィッツジェラルドの伝記では、それが必ずしもそうなっていない。過去の間違いの多くは訂正されてきているが、過去の伝記作家たちにおける正しい認識と判断に基づく正確な伝記的事実が40年も後になって、間違った事実で塗り替えられるというようなことが生じたのである。私は、なぜそういうことが生じたのか、どこに問題があったのかを考察することを本論の主眼としている。

上記に示されたように、フィッツジェラルドの伝記作家が陥りやすい間違いは、*Ledger* の取り扱い方から生ずることがしばしばである。私の知

10） *Far Side of Paradice*. Revised edition, 1965, p. 249. 以下、同書を引用もしくは参照する時は頁数のみ示す。

る限り、最も顕著で、最も深刻な例は、フィッツジェラルドが妻子と一緒に住んでいたLa Paixで起きた火事の記述に関してである。*Ledger*（187）では1933年8月のこととして2度、言及がある。フィッツジェラルドの最初の伝記を書いたマイゼナーは“Ledger”を参照していたが、この火事を同年6月に起きたと記す（254）。La Paixはターンブルの父親が所有する敷地内にあった旧邸の名称で、フィッツジェラルドはその館を1932年5月から1933年11月まで賃貸し、そこで*Tender Is the Night*を完成させた。火事は旧邸の二階が火元で、妻ゼルダの不始末が原因とされている。火事がいつ起きたかは、フィッツジェラルドが完成出来た最後のnovelの進捗状況とも関係し、フィッツジェラルドの伝記的事実として些末な事柄ではない。アンドゥルー・ターンブルはこの時12歳、旧邸から少し離れた同一敷地内の本邸に住み、この火事の目撃者であった。ターンブルはフィッツジェラルドの二番目の伝記を書くことになるが、少年時の強烈な体験であり、忘れることの出来ないこの火事をマイゼナーと同じく、6月に起きたと記す（246）。しかし、フィッツジェラルドとのこの日付の齟齬をフィッツジェラルドの記憶違いと簡単に片づけることは、私には出来なかった。その後、フィッツジェラルドの記録に従った伝記が現れたからである。ブルッコリは*Some Sort of Epic Grandeur*第2版（2002年）において、この火事を報じた新聞The *Baltimore News*の記事を引用したうえで、*Ledger*と同じく、1933年8月に起きたと記す（356）。[11] フィッツジェラルドとブルッコリは8月説。マイゼナーとターンブルは6月説。どちらの側にも目撃者の記述がある。この矛盾は『完訳フィッツジェラルド伝』の訳者もその注記で指摘した（263）。アメリカの学者たちにも意識されていたと思う。Jackson Bryerは、2002年にフィッツジェラルドとゼルダの往復書簡集*Dear Scott, Dearest Zelda*を編集・出版した時に、

11）私には*Some Sort of Epic Grandeur*第2版を読んだ時の記憶が強いのでこのように記すが、ブルッコリは同書初版（1981年）で8月説を主張しており、その後もその主張を変えることはなかったと言う方が、客観的には正しい。

La Paix における火事の報道記事にある現場写真を載せ、その説明文の中で、1933 年 6 月と記している（176）。この火事の現場写真がフィッツジェラルドに関する本の中に出て来るのは、これが初めてではない。ブルッコリが 1974 年に編集・刊行した *The Romantic Egoists*（192）に掲載されたのが最初である。二書における現場写真を比較すると同一の写真であることが分かる。どちらも、フィッツジェラルドの一人娘スコティーがプリンストン大学に寄贈したフィッツジェラルド関係文書の中にある新聞記事の写真を元にしている。プリンストン大学の資料は新聞記事を切り抜いたものであり、新聞名は分からない。これを The *Baltimore News* と同定したのはブルッコリである。フィッツジェラルド学の二人の権威、ブルッコリとブライアーが、同じ資料を使って、真っ向から対立する見解を述べている。これが、2002 年当時、フィッツジェラルド伝記研究の一つの問題点であったと言えるだろう。私は遅ればせながら、この問題に興味を抱き、源を確かめれば解決出来ると考えた。The *Baltimore News* の記事本文の一部（ブルッコリによる引用部分）が分かっているのだから、何らかの方法で、記事の日付を特定出来ると考えたのである。答えは比較的短期に得ることが出来た。[12] The *Baltimore News* の記事は 1933 年 6 月 16 日の日付で、「今日、Rodger's Forge（La Paix の住所）の F. Scott Fitzgerald の家の二階で火事が発生し、貴重な原稿や書籍、絵画が損傷した」という文で始まる。ブルッコリの間違いは明らかである。ブルッコリは、*Ledger* における記述をしばしば引用するが、ターンブルとは異なり、*Ledger* を使う時は非常に慎重で、前記したように、他の文書（フィッツジェラルドが Harold Ober に書いた手紙等）と矛盾する時には、しかも、矛盾する時は稀ではないが、*Ledger* の記録を採用することは殆どない。しかし、この時だけ、既にマイゼナーやターンブルが 6 月と正確に記していたにも拘わらず、*Ledger* の記録する通り 8 月と判断して、間違

12） 学習院大学図書館レファレンス担当者と Enoch Pratt Free Library の多大な支援を得て、初めて可能になったことである。私単独では、答えに到達出来なかった。

えたのである。

フィッツジェラルドの研究者は誰でもそうだが、私はブルッコリの大きな学恩を受けている。*F. Scott Fitzgerald: A Descriptive Bibliography* を始め、ブルッコリが築き上げた確固たるフィッツジェラルド学が無ければ、今日のフィッツジェラルド研究は誰にとっても成り立たない。個人的にも恩になった。1996 年に初めてブルッコリと会い、その後は年に数回の文通を続け、2005 年に再会し、その後も彼の死まで文通を続けた。私は少しでも多大な学恩に報いたいと思い、2002 年に *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald* 第 2 版が出版された時、ヘミングウェイ夫妻とフィッツジェラルド夫妻が 1928 年の秋、共にプリンストン大学でフットボール試合を観戦した時の日付（同書 p. 267 では 11 月 19 日となっているが、正しくは 11 月 17 日）が間違っていることを手紙で指摘したこともある。ブルッコリからはすぐに返事が来、「土曜日と記憶していたが、違う年のカレンダーを見ていた、改訂版で直す」と書いてあった。[13] 私はその時には、上記のもっと重大な日付の間違いがあることに気付いていなかったのである。くり返すが、私はブルッコリの学業に大きな敬意を抱くものであり、人間としても深く尊敬している。私が今、ブルッコリの間違いを問題にするのは、大学者の間違いを伝えたいのでもなければ、その間違いの内容が深刻であることを主張したいのでもない。私が真に深刻だと考えるのは、1960 年代にターンブルやマイゼナーにより、正確な日付が示された伝記的事実に関し、40 年後に、なぜ間違った日付が与えられるようなことが起きるのかという問題である。これでは学問が進歩しているとは言えないと言ったら、言い過ぎだろうか。前記したように、ブルッコリは *Ledger* を鵜呑みにせず、他の資料で事実の確認を行うのが基本姿勢である。それでも間違えた。私は、この原因を考えた時に、ここ数年、特に強く意識するようになったことだが、アメリカにおける伝

13） 2008 年、ブルッコリの死去により、この誤記は訂正されなかった。

記叙述の方法上の根本問題とでも名付けたい事柄に触れないわけにはいかない。伝記は文学としての読み物でもあるから、無味乾燥な情報の集積になることを望む人はいない。情報の集積を一つの極端とすれば、その反対側の極端とまでは言わないが、そこに近いところで書かれてきたのが、少なくも、これまでのフィッツジェラルドの伝記だったのではないかという思いが私にはある。ターンブルによる伝記は、ターンブル自身が目撃者であった La Paix の火事をほぼ唯一の例外として、フィッツジェラルドの *Ledger* の記録に無批判に従ったため、事実としての誤りが非常に多い。マイゼナーの伝記は、専門学者が多大な時間を費やして描いたものだけに、事実の誤りは少ない。作品から引用する時には典拠も注記する。しかし、マイゼナーは La Paix の火事の日付を特定する時に、*Ledger* の記述は誤りと判断した根拠を示さなかった。目撃者のターンブルやターンブルの母親にインタービューした可能性もあるが、何らかの文書資料を読んだ上で、*Ledger* の記述を排した可能性が大きいと思う。そうでないと、*Ledger* において二度も言及されたことに対し、間違いと判断することは困難だった筈である。もし、マイゼナーが文書資料を読んでいたとしても、それを注記するような慣行は当時のアメリカの伝記叙述においてなかったし、今もない。私が感ずる一番大きな問題はここなのである。ブルッコリはマイゼナーを精緻に読んでいた。マイゼナーへの言及もある（178）。もしマイゼナーが、La Paix の火事を 1933 年 8 月ではなく、6 月に起きたと記す根拠を示していれば、40 年後のブルッコリの間違いは生じずに済み、そのような慣行があれば、正確な事実の積み重ねが、フィッツジェラルド研究の進展とともにますます厚みを増し、逆進するような事態は防止出来ると思うのだ。フィッツジェラルドの *Ledger* に、或いは彼の手になるその他の自伝的資料に記された事柄が事実として正しい、或いは正しくないと判断した根拠を示す。可能であれば文書資料を根拠として示す。歴史学であれば、恐らく行われていると思われる慣行を確立出来なければ、同種の誤りは繰り返し起こると思う。

伝記記述において、事実を裏付ける文書資料を示さないことから生ずる間違いの例として、もう一つ、フィッツジェラルド伝記研究のモデルとされるマイゼナーの *Far Side of Paradice* の場合を取り上げたい。フィッツジェラルドは第1次世界大戦が終結した翌年、1919年にアメリカ陸軍を除隊しているが、除隊日を明記したのはマイゼナーとターンブルのみである。しかも、両者は矛盾しているのである。ターンブルはフィッツジェラルドが除隊したのは2月18日と書く（93）。しかし、マイゼナーによると2月14日（85）である。また、公刊されているもので、これに関連する唯一の資料は *Ledger* であり、1919年2月の項に、“The Last night, supplies, goodbyre（sic）Ryan（フィッツジェラルドの仕えた将軍）. Left on 18th”（173）とある。こうした食い違いを背景に、『完訳フィッツジェラルド伝』は「除隊命令は2月14日付、ニューヨークに向かったのは18日とする説もある」（98）と注記したのである。私の知る限り、『完訳』以前にこのような説はなく、恐らく『完訳』訳者の解釈を述べたのだと思う。アメリカの他の伝記作家たちはブルッコリを含め、日付の食い違う除隊日の問題には触れず、2月に除隊したとか、早期に除隊したと書くのみである。彼らが黙殺する理由は私には分からない。La Paix における火事の日付の食い違いの時も同様であるが、アメリカ人の書くフィッツジェラルドの伝記においては、このようなケースでは黙殺するのが常態である。異論を併記したのは『完訳』の注のみであることを指摘すれば、アメリカにおける伝記記述の問題がより鮮明に浮かび上がるのではないか。*Ledger* の “Left on 18th” は、18日に基地を離れたと読むのが通常だろう。とすれば、除隊命令は当日ではなく、その前に出ている、という推定が自然になされる。ターンブルは “Left on 18th” を除隊命令の日と考え、マイゼナーは基地を離れた日と解釈したと受けとめられやすい。しかし、除隊命令を14日と特定するからには、マイゼナーは何か根拠を持っていた筈だ。そうでなければ、18日以前とは推定出来ても、14日とは特定出来ない。アメリカの伝記作家やフィッツジェラルド学者がこのような問題に

拘泥しないのは、どちらの日付でもさしたる違いはないと考えているからではないか、もっと本質的な事柄に目を向けるべきだ、という意見はあるだろう。私の考えは、公刊された伝記に明きらかな食い違いが生じた以上、放置するよりも、可能な限り文書資料を博捜し、決着が付かないことも含め、食い違う伝記的事実について現段階での説明をするべきだというものである。それをしないと、La Paix の火事の日付に関して起きた、不毛な誤りと言うべきことが繰り返され、果たしてフィッツジェラルド学は前進しているのかという深刻な疑いを抱かざるを得ないようなことが繰り返されると思うからだ。除隊日の問題に戻ろう。もし、フィッツジェラルドに対する除隊命令文書があれば、発令日を確認出来る。私はこのように考えた。この後は再び、学習院大学図書館レファレンス担当者に助けられた。私が最初にアプローチすべき機関は合衆国軍事アカデミー図書館（United States Military Academy Library）であった。旬日後、そこから詳細な返事があり、「あなたが求める文書があるとすれば、the National Records and Archives Administration of the United States で、そこに米軍退役者の軍務記録が保管されている。もう一つの可能性はプリンストン大学図書館所蔵のフィッツジェラルド文書に収められている “Army Discharge, undated” というアイテムである。軍務記録は一般に、家族以外には情報公開しないが、あなたがプリンストンで得られる資料を基に、情報公開請求すれば認められる可能性がある」という内容であった。フィッツジェラルド文書のアイテムまで教えられたことは、研究者の端くれとして汗顔の至りであったが、ここまで支援されたら、もう進むしかないと意を強くしたのである。私はプリンストン大学にアプローチして、必要なアイテムの内容を知ることが出来た。アイテムのタイトルに undated と付されているので、誤解しやすいが、この文書は、「合衆国大統領の命令に基づき、米陸軍少将 W. A. Holbrook」によって、フィッツジェラルドに発令された除隊命令書そのもので、「1919 年 2 月 18 日を以て除隊を命ずる」とある。[14] 私の予想に反し、恐らくは多くの研究者の予想に反し、

ターンブルが正しくて、マイゼナーが間違っていたのである。今、私が読むことの出来た二つの文書資料、*Ledger* と除隊命令書からは一つの結論しか出てこない。フィッツジェラルドは 2 月 18 日に除隊命令を発令され、同日に基地を離れた。あり得ないことではない。正式な除隊命令書を発令される前に、除隊の準備をするよう非公式に告げられることは考えられるし、同日では除隊準備が出来ないということには必ずしもならない。マイゼナーが除隊を 2 月 14 日とした根拠は不明と言うしかないが、マイゼナーの記述が一定の説得力を持ったのは、彼が証拠文書を示さなかったからであり、証拠のない状況では、彼の記述は、*Ledger* の記録に基づく私たちの推定にうまく整合したからである。ターンブルによる日付は、*Ledger* の記述との整合性を考えれば受け入れにくかった。しかし、一見あり得ない日付をターンブルが示したのは、プリンストンにあった除隊命令書を読んでいたからの筈だ。このケースがいみじくも教えてくれることは、証拠文書が無い所で、合理的に思える推論を重ねると、事実とは異なる結果に陥りやすいと言うことだ。実は、マイゼナーは、除隊後のフィッツジェラルドがニューヨークに向かう伝記的事実の日付においても間違った推定をしているのである。

マイゼナーによると、フィッツジェラルドは 2 月 19 日、ニューヨークに到着するとゼルダに電報を打つ（86）。“While I feel sure of your love, everything is possible. I am in the land of ambition and success…” という内容を含む、しばしば伝記等で引用される有名な電報だが、マイゼナーは 2 月 19 日とどのようにして日付を特定出来たのだろうか。プリンストン大学図書館にあるこの電報は、前記の *The Romantic Egoists*（48）に収載されているが、日付の部分は欠落している。恐らくマイゼナーは、*Ledger* の記録により 2 月 18 日にアラバマの陸軍基地を出立したフィッツジェラルドは、翌 19 日にニューヨークに着くや、すぐにこの電報を打っ

14） 原文書の複写を私はプリンストン大学から得ることができた。

たと推定したのだろう。しかし、これはあり得ないのである。*The Romantic Egoists*（48）はフィッツジェラルドがゼルダに出した別の電報も掲載しているが、それは発信地が、彼がアラバマからニューヨークに向かう途中のノースカロライナ州 Charlotte で、日付は 2 月 21 日である。ブルッコリは、翌日、つまり 22 日にフィッツジェラルドはニューヨークに到着し、引用した電報を打ったと記す（93）。ニューヨークから発信した日付の欠落した電報をブルッコリが 22 日と特定出来た理由ははっきりしないが、マイゼナーの日付が全くあり得ないのに対し、2 月 22 日は可能であり、途中駅の Charlotte からも電報を出していることから推察出来るように、ニューヨークに着いたらいち早く、ゼルダに電報を打ったと考えることは私には理解出来る。マイゼナーの伝記は、全体として水準は高いし、優れた文章、作品分析の質の高さ、特に *Tender Is the Night* の成立プロセスを解明する時の鋭い洞察等、高い評価を受けていることに私は納得しているが、それにも拘らず、伝記的事実の記述において、上記したように、証拠文書の取り扱いが周到でなかったり、間違った推定をいくつも行ったということは指摘しておかなければならない。[15)]

15）ターンブル（注を付けたペリカン版）にも共通する問題だが、マイゼナーの伝記におけるもう一つの欠陥を指摘しておかねばならない。マイゼナーの *Far Side of Paradise* をフィッツジェラルド研究の資料として使う場合、非常に利便性の悪さを感ずることがあったからである。ターンブルもマイゼナーもフィッツジェラルドの “Pasting It Together” と “Handle with Care” を伝記資料として何度か引用している。この二つのエッセイは Edmund Wilson が 1945 年に *The Crack-Up* の中に編集した時、エッセイのタイトルが取り違えられたことはフィッツジェラルド研究者の間では知られている。私の知る限り、取り違えに最初に気付いて指摘したのはブルッコリである（400）。ターンブルもマイゼナーもこの取り違えに気付かずに引用しているので、読者が *The Crack-Up* を参照する時に混乱が生ずるのである。現在流布している Wilson 編集の *The Crack-Up* には二種類あって、私の知る限り、遅くとも 1993 年以降はタイトルの取り違えを直した版が出ている。これが混乱に輪をかけた。この事情を知らないと、マイゼナーはどちらのエッセイを引用しているのか、或いは、マイゼナーがタイトルの取り違えを見抜いていたのかどうかさえ、分からなくなることがある。2005 年に出版された Cambridge 版 *My Lost City* には二つのエッセイが正しいタイトルで収載されているが、Wilson がタイトルの取り違いをしたこと、ブルッコリがそれを初めて指摘したこと、その結果として、二種類の *The Crack-Up* が流布していること、このような *The Crack-Up* の問題を Cambridge 版編者 James West は全く記さなかった。その結果として、*The Crack-Up* を参照する読者は混乱の中に放置されていると思う。本論とは別のテーマになるが、West にはブルッコリの業績を過小評価する傾向がある。そ

本論は、フィッツジェラルドの伝記的事実に関し齟齬のある問題として、特に、La Paix における火事の日付とフィッツジェラルドの除隊日を、それぞれ決定的証拠文書を示して特定した。この二つの齟齬について明示したのは、私の知る限り、既に言及したが、『完訳フィッツジェラルド伝』のみである。その書では、齟齬の問題提起がなされたが、解決は試みられなかった。本論は結果的に、この二つの齟齬について解決を示すことが出来た。[16] 本論は更に、伝記的事実に関する齟齬が解決されない根本的な理由として、これまでの伝記では証拠文書の提示が極めて不十分であることを示した。真の解決策は、既に注 8 で言及したことだが、これまでの伝記の叙述の仕方を改めて、事実の齟齬について沈黙や回避を続けるのではなく、可能な限り文書資料を具体的に示して、齟齬が生ずる所以とその解決の仕方を読者に開かれた形で提起出来る伝記が書かれることにある。より

れが最も露骨に出ているのは、Cambridge 版 *All the Sad Young Men* に収載された "Jacob's Ladder" の刊行史の説明をする部分（xxx）である。ブルッコリが 2 度にわたり編集した "Jacob's Ladder" が如何に不完全であるかを示唆しているが、それは事実の記述であるからよいとしても、なぜ、*The Crack-Up* 刊行史の問題については全く説明しないのか、私は不自然に感じた。

16）『完訳』を精読した私の感想を記そう。原著の *Scott Fitzgerald* は読み物としては面白く、また前記したように、他の追随を許さない価値を有するが、不正確な記述が多く、研究資料として使いにくいという問題があったが、『完訳』がその註の中で、原著の誤りの多くを訂正し、原著者による引用の誤りも指摘（136 注 17）する等、学問的批判に答えうる伝記の水準に引き上げたと思う。ペリカン版の注を参考にした部分が多いことは否定出来ないが、ペリカン版にはない注のほうが恐らく数多く、またペリカン版の注の間違いも指摘している。翻訳当時、参照可能な原資料の殆どを直接調べたことは明瞭である。勿論、完全とは言わない。『完訳』（345）の注 52 に、フィッツジェラルドが娘スコティーに宛てた手紙の日付が 1940 年 3 月 15 日となっているが、2 月 19 日の間違いである（*Letters of F. Scott Fitzgerald*, 64）。また、ターンブルは、フィッツジェラルドがゼルダに宛てた別々の二つの手紙（1939 年 8 月 16 日付及び同 18 日付）を同一のものとして引用し、読者を混乱させる大きなミスを犯したが（309）、『完訳』にはその指摘は無い。フィッツジェラルドのゼルダへの手紙（August 16, 1939）は、2002 年、*Dear Scott, Dearest Zelda* の中に初めて収載された。『完訳』の時点，1988 年当時は殆ど知られていなかった。『完訳』は、ターンブルの伝記の欠陥を非常によく訂正し、詳細な補注をほどこしたが、『完訳』当時の資料的限界故に、ターンブル最大の錯誤（309）には気付かなかったのであろう。しかし、私が『完訳』から受けた最も深い印象はこのようなことではない。実は、私は、『完訳』（157）の注 17 にある、フィッツジェラルドが地元の女子青年連盟のために書いた喜歌劇の台本のタイトル「真夜中のフラッパーたち」がどの資料によるのかなかなか分からなかったが、偶然、*The Romantic Egoists*（89）にあるのを発見し、日本におけるフィッツジェラルド研究の二人の先達はここまで勉強していたのかと思わず頭が下がったのである。

具体的に言えば、事実の裏付けになる文書資料を基本的に明らかにしないマイゼナーをモデルとするような伝記はもうこれ以上書かれる理由はなく、Reynolds のヘミングウェイ伝を一つの指針とするフィッツジェラルドの伝記が今こそ必要なのである。この方向で、私が本論でなしたことはわずかだが、これからも、私に出来る貢献を続けたいと思っている。

Bibliography

Primary Sources: Works by F. Scott Fitzgerald

F. Scott Fitzgerald's Ledger (*A Facsimile*), ed. Matthew J. Bruccoli. Washington: Bruccoli Clark/NCR, 1973.

Thoughtbook of Francis Scott Key Fitzgerald. ed. Kuehl. Princeton, N.J.: Princeton University Library, 1965.

The Romantic Egoists: A Pictorial Autobiography from the Scrapbooks and Albums of Scott and Zelda Fitzgerald, ed. Matthew J. Bruccoli, Scottie Fitzgerald, and Joan P. Kerr. New York: Scribners, 1974.

My Lost City. Ed. James L. W. West III. New York: Cambridge University Press, 2005.

All the Sad Young Men. Ed. James L. W. West III. New York: Cambridge University Press, 2007.

Bryer, Jackson R., and Cathy W. Barks, eds. *Dear Scott, Dearest Zelda: The Love Letters of F. Scott and Zelda Fitzgerald*. New York: St. Martin's Press, 2002.

Turnbull, Andrew, ed. *The Letters of F. Scott Fitzgerald*. New York: Charles Scribner's Sons, 1963.

Bruccoli, Matthew J., ed. *As Ever, Scott Fitz--: Letters between F. Scott Fitzgerald and His Literary Agent, Harold Ober--1919–1940*. Philadelphia: J. B. Lippincott, 1972.

Bruccoli, Matthew J., and Margaret M. Duggan, eds. *Correspondence of F. Scott Fitzgerald*. New York: Random House, 1980.

Secondary Sources

Baker, Carlos, *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Charles Scribner's Sons, 1969.

Bruccoli, Matthew J. *F. Scott Fitzgerald: A Descriptive Bibliography*, revised edition. Pittsburgh, Pa.: University of Pittsburgh Press, 1987.

Bruccoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. Second revised edition, Columbia: University of South Carolina Press, 2002.

Bruccoli, Matthew J. *Fitzgerald and Hemingway: A Dangerous Friendship*. New York: Carroll and Graf, 1994.

Donaldson, Scott. Fool for Love. New York: Congdon & Weed, 1983.

Mizener, Arthur. *Far Side of Paradise: A Biography of F. Scott Fitzgerald*. Revised edition. Boston: Houghton Mifflin, 1965.

Reynolds, Michael. *Hemingway: The American Homecoming*. Oxford: Basil Blackwell, 1992.

Turnbull, Andrew. *Scott Fitzgerald*. New York: Ballantine Books, 1971.

Turnbull, Andrew. *Scott Fitzgerald*. Pelican Books, 1970.

The *Baltimore News*, June 16, 1933.

St. Paul Pioneer Press, May 23, 1910.

“Army Discharge, undated.” Page 55 of Fitzgerald Scrapbook VII.

ターンブル，アンドゥルー、『完訳フィッツジェラルド伝』（永岡定夫・坪井清彦共訳）、こびあん書房、1988 年